

ことばにおける声と意味

——ジャルゴンをめぐる——

矢野 のり子

I. はじめに

空気まぐらの話

周吉ととみ、仕度が続けながら——

とみ「空気枕、そっちに這入りやんしたか」

周吉「空気枕、お前に頼んだじゃないか」

とみ「ありやんしえんよ、こっちにゃ」

周吉「そっちによう、渡したじゃないか」

とみ「そうですか」

と、自分の荷物を探す。

.....
.....

とみ「空気枕、ありやんしえんよ、こっちにゃ」

周吉「ないこたないわ。よう探してみい——

(といいながら自分の荷物の中に発見して) ああ、あったあった」

とみ「ありやんしたか」

周吉「ああ、あった」

そしてまた二人で仕度をつづける。

小津安二郎監督の「東京物語」の冒頭の台詞である。老夫婦が東京に住む息子を訪ねるための旅支度をしている場面である。空気枕という実体があるようなないようなものをめぐって「ある」、「ない」の会話がゆっくりと続く。

2 (矢野)

空気枕は無意味なものではなく、後になってとみが急死する原因への伏線となっている。しかし、若い頃この冒頭のシーンを見たときにはなんのことも理解できなかった。何度目かに見たときには、自分の関心領域もあって、これらの会話はほとんどジャルゴンのように聞こえたのである。

ジャルゴン (jargon) という語は本来「わけの分からないことば」という意味で用いられ、西洋諸語においては日常語に属するという。とくに失語学においては、失語症患者が流暢に話すわけの分からない発語をジャルゴンと総称する(波多野, 1991)。成人のジャルゴン失語において、ジャルゴンは「言語の意味的価値の病態否認的解体」と定義される。一方、ジャルゴンは言語発達においても使用される。村井(1995)は、喃語期を過ぎた言語発達過程において、子どもが養育者に話しかけるような発声、あるいはひとり言のように聞こえる発声に注目し、これを子どものジャルゴンと呼んだ(同一音や類似音が繰り返される反復喃語はジャルゴンとみなさない)。子どもにおけるジャルゴンは生後1歳頃、反復喃語の減少とあいまって増加し、15ヵ月頃ピークを迎える。それ以降は調音の能力に対応して、有意味語優勢の発話になっていく。本論では、反復喃語ではなく、強弱や抑揚などのプロソディのある発声による、意味内容のほとんど不明なおしゃべりをジャルゴンとし、その初期言語発達における機能や関連する諸相をみていきたい。

II. コミュニケーションとは

一般にコミュニケーションというとき、送り手から受け手へのメッセージ伝達がイメージされる。伝達される情報は、受け手の応答に関係なく、ア・プリオリに特定の意味や意図が仮定されており、しかも会話参与者間で、その正確な伝達・再現が志向されているという意味での「伝達モデル」である。しかし、実際の発話場面においては、先行発話に対し、後続発話によって理解が示され、それを契機に、さらに後続発話へと連鎖が形成される。ターンテキングや復唱はこのような状況下では強く求められるし、場面によって、ひとつの発話がさまざまな意味に読み取られることはコミュニケーションの

場においては多々ある。そして、その基底にあるのが声のやりとりである。

会話や発話において人が声を用いているという側面は、言語 (language) の研究対象からしばしば看過されてきた。心理学においても発話は認知や思考とのかかわりで焦点づけられ、声のもつ情動性や共同性はほとんどかえりみられることがなかった。しかし、人のことばの発達をみていくとき、声を用いた発話の問題は認知面からだけではとらえきれない。

Bakhtin (1929/1979) は、ことばとは「話し手と聞き手の相互関係の所産である」とする。そして、発話によって実現される言語的相互作用という社会的出来事に着目し、他者のことばとの間に成立する「対話」を言語活動の中心に据えた。Goffman (1963/1980) もまた、応答は、いま、ここでの発話を通してしかなしえないとし、会話の連鎖に重点をおくコミュニケーション・モデルを示唆している。会話は複数の参加者がその声の交換によって行う共同行為である。会話の参加者は、相互に「話し手」と「聞き手」の役割を交替しながら、話を進めていく。そこにおいては、相互に対面しつつ関与をくりかえす、発話主体の関与の“場”が重要となる。

ことばはまず発話として出現する。声によるコミュニケーションであるおしゃべり機能が基本といえるだろう。Saussure (1916/1972) は、言語を“ランゲージュ (language)”とし、“ラング (langue)”と“パロール (parole)”の二つに区分する。ラングは言語体系というべきもので、語彙的にも文法的にもひとつの体系をなしている。ラングにおいて、意味は記号と対象 (能記と所記) との指示関係に基づく「記号体系との整合性」とのなかで問われる。Saussure にとって、言語学の第一の対象はラングと呼ばれる言語記号のシステムであり、パロールについては研究を展開していない。ラングはパロールなしでも成り立つが、その逆はありえないと Saussure はいう。Ogden & Richards (1923/1951) は Saussure に反論し、対象 (所記、意味サレルモノ) と言語シンボル (能記、意味スルモノ) が結びつけられるのは、人間の精神作用を介在させてはじめて可能であるとする。

しかし、Ogden & Richards においても能記はあくまで音であり、必ずしも

4 (矢野)

対話場面での声ではない。現実の対話場面においては、「ア」の音声は、「あっ」であったり、「あー」であったりして状況によって意味が付与される。ことばにおける意味を検討するとき、子どもにとって記号のマッチングの世界へ参入するには時間がかかる。表面的に記号の意味世界に参入していくことのみを追い求める（例えば、語彙数でもって言語発達をみていく）ことは、子どもの生活世界から乖離しているだろう。原初的コミュニケーションも含めてことばについて考えるとき、声が発せられる意味と文脈は重要である。ここでいう文脈とは、前後の文脈であり、またことばがかわされる場の文脈の双方を指す。

人類学者の Malinowski は、*phatic communication* という用語を用いて、話の内容によってではなく、ことばを交しあうことそれ自体を通じて、絆を確かめ合うような言語活動に注目することを提案した (Laver, J., 1975)。また、言語学者 Jakobson (1962/1973) は、言語を認知的側面にのみ限定することはできない、という。ことばを交わすことは、それ自体、コミュニケーションの回路を確保し、あるいは確認する働きをもつ。Jakobson はこのような、「接触に対する構え」を Malinowski の術語を借りて、“交話的機能 (⁽²⁾*phatic communication*)” に属するものとする。

「さて」と青年は言った。「ええ」と彼女。

「着いたよ」と彼。「着いたのねえ」と彼女。

「そうさ、やっと着いたんだ」と彼。「ええ」と彼女。

「うん、そうさ」と彼は言った。

Jakobson が引用するこの二人の会話は、“指示機能(情報の伝達とその解説)”からすれば、「私たちは着いた」という事柄について述べているにすぎない。着いたことは状況が語っている事実であり、二人の間でその情報を伝達、解説する必要はないと思われる。この会話が果たしている役割は、コミュニケーションの確認であろう。Jakobson はこのような交話的機能は、また子どもが獲得する最初の言語機能であることを指摘している。子どもは情報をもったメッセージの発信や受信ができるようになる以前に、すでに交話を行

おうとしているのである。

ことばはまず発話として出現する。それは他者によって完結される。正高(1993)は、生後2ヵ月の乳児の授乳行動の観察から、赤ちゃんがクレーイング⁽³⁾によって母親と声を使ってコミュニケーションをとる様子を報告している。赤ちゃんは授乳の際、一気に飲まず、吸っては休み、吸っては休みというパターンを繰り返す。休んでいる時、母親が揺すったり話しかけたりするのだが、母親が働きかけなくても、赤ちゃんの方からクレーイングという発声によって母親とコミュニケーションをとろうとする。他者とコミュニケーションをとろうとする指向性が先天的に乳児に備わっているのだといえる。子どもの初期言語発達をみていくとき、他者とともにあることへの指向性やターネーキングの問題が浮かび上がってくる。

原初的なコミュニケーションでは、声も意味も未熟でグローバルかつ未分化なものであるが、その時点でも子どもはまわりの人との情動的なかわり合いを通してやりとりをしていく。初期言語発達においては、成人の病理の指標（一部は子どもの病理の指標ともみられている）として扱われるジャルゴンが特徴的にあらわれる。これらは、大人のことば（記号的意味）を基準にすると誤り多い未完成なものとして位置づけられる。しかし、だれもが未熟なものを抱えながら成長していくのであり、言語の認知的側面（あるいは情報の伝達と解説）のみで人はコミュニケーションをとっているわけではない。大人の失語患者が話すわけのわからない発話として記述されてきたジャルゴンが、子どもの初期言語発達において特徴的にあらわれることに焦点をあて、その機能を検討する。

Ⅲ. 初期言語発達におけるジャルゴン

Ⅲ-1. ジャルゴンタイプの言語発達

矢野(2006)は、初期言語発達におけるジャルゴンについて詳細に検討した。1歳半健診とその後の経過観察における量的データとひとりの男児(Y児)の縦断的観察記録の解析を試みた。そこにおいて、子どもの初期言語発

6 (矢野)

達において、表出言語における有意味語の出現が遅れ、意味をなさないジャルゴンでの発話が盛んな「ジャルゴンタイプ」の一群が存在することを報告している。ジャルゴンタイプの言語発達を示す子どもは、言語理解は良好で、疎通性もよく、象徴機能の形成も認められた。また、発話量が豊富でジャルゴンにより他者とコミュニケーションをとっていかうとする。ことばの交話的機能は十分にある。

ジャルゴンでの発話が盛んなこれらの一群を“ジャルゴンタイプの言語発達”と名づけ、量的解析を行った結果、次の諸点が明らかとなった。

- ①男児が女児の3倍以上出現する。
- ②活動水準が高く、フリ遊びが盛んであり、運動性の発達が関係している。
- ③ジャルゴンによる流暢な発話が優勢で、一語ずつの音声模倣はめだたない。
- ④2歳半頃には正常範囲内の言語発達に達する。

表1 ジャルゴンと発達諸相の分析

	始歩		音声模倣		フリ遊び		活動水準		自我水準		育児困難の訴え	
	平均早	平均遅	なし	あり	なし	あり	低	高	低	高	なし	あり
非ジャルゴン群	7	1	2	6	4	4	6	2	5	3	4	4
ジャルゴン群	34	22	42	14	8	48	14	42	35	21	23	33
Fisherの直接法(P)	0.241		0.009		0.035		0.009		1.000		0.712	

「Fisherの直接法は両側検定」(統計計算にはSPSSを使用した)

これらジャルゴンタイプの言語発達を示す群は、有意味語での表出語の未熟さが2歳過ぎまで残るものの、基本的に言語発達遅滞とはいえず、初期言語発達における一類型と考えられる。発達のある時期、ジャルゴンによる発話で他者とコミュニケーションをとっているのだと思われる。ジャルゴンタイプの言語発達群においては、活動水準が高く、運動性の発達が早い。そこから姿勢運動の発達と言語発達が深く関連しているのではないかと示唆される。このことは、ジャルゴンの出現が音声模倣と有意な負の連関(相関)

を示し、フリ遊びという行動模倣とは正の連関(相関)を示していることから検証される。神経解剖学的には、乳児の初期の段階では、脳の中の言語野と運動野のニューロンの連絡が著しく密接で、1歳頃になって双方が分離すると報告されている(Molfese & Betz, 1987)。Locke (1993)は喃語の出現に先行して、多音節音の発声行動とリズムミクな身体の動きが同期するという現象を報告している。

また、このタイプの言語発達を示す子どもは、有意味語を一語ずつオウム返しに音声模倣していくよりも、まずおしゃべりとしての発話そのものを確立していくのではないかと思われる。音声言語の習得に対して、耳から入力する刺激をオウム返しにまねていく音声模倣は、ジャルゴンタイプの言語発達と負の連関を示した。ジャルゴンタイプの子どもは発話のリズムやイントネーションに深く同期しているように思われる。あるいは言語様態の発達という観点から見ると、聴覚的入力系の発達が先行するタイプ(音声模倣タイプ)と口頭発話出力系の発達が先行するタイプ(ジャルゴンタイプ)があって、それぞれにおいて性差や運動面の発達との連関の様相が異なる可能性も示唆される。

III-2. Y児の事例

ジャルゴンタイプの言語発達を典型的に示したY児(筆者の長男)の縦断的観察記録から、対話的な場面においてはジャルゴン発話という声そのものが意味を含みこみ発達し、言語体系へと分節化されていくことが示された。次の2つの事例では、Y児は他児とジャルゴンでやりとりしつつ遊びや共同作業を行ったり、けんかしたりしている。(以下にジャルゴンはカタカナで、有意味語はひらがな太字で表記する。また、下線部は助詞、助動詞の機能をはたしている部分を示す。なお、Mo<>内は筆者の発語である。)

観察1にみられるように、Y児のジャルゴン発話では、語彙よりも統語機能をもつ助詞や助動詞が先行して出現している。助動詞“や”(助動詞“だ”に相当する関西弁)、“やん”(助動詞“だ”と終助詞“ね”に相当する関西弁)、終

助詞または間投助詞“ね”や“や”によって、発話が文節化され会話のフレームが作られていく様子がうかがわれる。

【観察 1】(1歳4ヵ月6日)〔窓から外を見る。年長兄が何人か寄ってきて、
Y 兄の相手をすると Y 兄はジャルゴンでしゃべって応答〕

Y カクウクウン〔Y 兄が窓に寄っていく。外で子どもの声。4歳の
女の子とジャルゴンで話す〕ウググウ～ン チチュウアン

<おんなの子「Y くんひとりで遊んでるの?」>

Y アチュアアアウウウアン ジュウジュアやん

〔その後、女の子は筆者に向かって保育園のことをいろいろ話す。やがて保育園児や小学生の近所の子ども4人が家に遊びに来て、鈴やハーモニカで合奏。年長の小4生がリードしてお地藏盆の練習をする。Y 兄は鈴持ってきて、筆者と聞いている。筆者に向かって Y 兄は話しかける〕

Y ナチュウナウ ユウウア ユアア マンマ チャウウア ヴウウウ
ン デジュウウ ジュジュヂジュウア アッ

<小学生のリーダー格の男の子が「Y くんもいっしょにする?」>

Y あい。イイチュウやん ヴヴァ チュチュウね デジュジュアン
ジューイジューイヤん〔合奏のなかにいれてもらう〕

次の観察例は10ヵ月年長のT君と取り合いのけんかの場面である。T君もY兄よりさらに表出言語における有意味語の出現が遅れたジャルゴンタイプの男児であった。また、T君も姿勢運動面の発達が早く、活動水準が高かった。T君が2歳6ヵ月のこの時期、T君の有意味語は20語足らずで、二語分はまだ出現せず、ジャルゴンが優勢な発話の段階にあった。

【観察 2】(1歳8ヵ月8日)〔T君と絵本見ているが取り合いのケンカになる。〕

Y アアアア・・・ アアーン〔絵本取られて〕ウウウウアン

T ギィイーイアー

Mo <いっしょしようね>

Y クアカカイ・・・コッ アッアアアア

T [また取る] ギーキー

Y アアーア・・・いやあ・・・

Mo <喧嘩しないでいっしょ見ようね>

Y カシユア

T チテユウア

Y チッ チユウア [また, 取り合う。二人とも叫ぶ] ギャア・・・

Mo <いっしょ見よう, 見せてあげようか>

Y あい

T アキュルルウ パパウン [また取り合う] ギユウアー

Y [Tが取り上げた絵本の表紙に小鳥がいるのに気づき] パハッ ヴィ
ヴィヴィ ぴっぴっぴっ

Mo <あっ小鳥さんいたね>

[横からTが取ってしまう]

Y ギユアー (叫ぶ)

T パッパッ

Y パイパイ パッ クォォォ・・・ キュルウン クチュウン

T パッパッ ポッポッポン [とっておもちゃ箱のなかから玉が出て受け
取るおもちゃ持ってくる]

Mo <ポンポンしようか>

Y ぼんぼん

Mo <お外でボールしようか>

T くっく くっく [と玄関へ]

T おんも おんも

Y おんもおんも おんも おんも

T おんも おんも

Mo <オンモ行こうね>

ここには、ジャルゴンでのケンカと、和解しいっしょに外へ行こうとする二人のやりとりがみられる。ケンカにおいてはジャルゴンによる叫びであった

のだが、和解状況では、双方から有意味語での復唱がみられる。また、両者のかけあいで、「びっぴっ」が「ぱっぱっ」に転化していき、さらに「ぼっぼっ」から「ぼんぼん」に擬音語が次々変化していく。そうして「ぼんぼん」の擬音語から実際の遊びであるピンポン玉を投げたり受けたりする遊具を見つけるのである。同じものをいっしょに見る絵本では優先権をめぐって取り合いになったのだが、二人でやりとりするゲームを見つけたとき、いっしょにしようと和解していくのである。

上記2例にみられたように、ジャルゴンタイプの子どもは、発達のある時期、ジャルゴンによる発話で他者とコミュニケーションをとっているのだと考えられる。ジャルゴンタイプの言語発達を示す子どもは声でのやりとりが先行し、その時期が長く続く。記号的意味の世界へ入っていくのが一見遅れるようにみえるが、その生活世界において、有意味語を早く獲得する子どもの前の発達段階にいるわけではない。ジャルゴンでのやりとりで豊かな対人関係を築いている。対人的な場面においては、ジャルゴン発話という声そのものが意味を含みこんでいるといえる。

IV. ジャルゴン失語との関係

ジャルゴンタイプの言語発達を示したY児の分析から、子どものジャルゴンそのものも発達し変化することが明らかとなった(矢野, 2006)。Y児のジャルゴンは、音韻的なバラエティが制限され、統辞的にも文節が不明で未分化な状態にとどまっている第1期から、失語学でいう語新作の出現に助詞・助動詞を付加するという形で文節が明瞭になる第2期を経て、有意味語が出現するが、その語の本来の意味では用いられていないために文意が通じにくい第3期にいたり、最終的にジャルゴンを脱するという経過をたどった。この経過は、Alajouanine (1956) が失語学におけるジャルゴンの発展段階を記述した仮説に、ほぼ対応すると考えられた。

Alajouanine は、成人のジャルゴン失語においてジャルゴンを「言語の意味的価値の病態否認的解体」と定義し、ジャルゴンに「①未分化型、②失意

味型, ③錯語型」の3型を区別した。現在では, これらは①未分化ジャルゴン, ②語新作ジャルゴン, ③意味性ジャルゴンと呼ばれている。治療により改善する時①→②→③と縦断的に経過するという。「未分化ジャルゴン」とは文法的にも語彙としても(音韻的にも)「未分化」なものである。「語新作ジャルゴン」では, 日本語の語彙に存在しない語新作が出現し, 助詞, 助動詞が付加して文節化する特徴がある。「意味性ジャルゴン」は, 日本語として存在する実在語の誤用, あるいは不適切な使用のために意味をなさない発話という。Y児のジャルゴンの発達過程は, 成人のジャルゴン失語患者が改善するときの経緯(未分化ジャルゴン→語新作ジャルゴン→意味性ジャルゴン)を辿って有意味語優勢な発話へといたった。

Jakobson (1941, 1963, 1966/1976)によれば, 「失語症による損傷は, 幼児の言語習得の逆を再現する」という。また別に Alajouanine (1956)らは, 失語における音韻変化である脱落・転倒・同化・異化などの現象が, 幼児語の音韻変化と類似していることを指摘している(大橋 1950, 1977)。小西(1960)は, 男児3例, 女児2例について満2歳までの言語発達を観察したデータから, 失語症において早期に失われやすい品詞は, 幼児の言語過程においてはより遅く現れる傾向があることを報告している。一方 Piaget (1960)は, Ajuriaguerra が老人の痴呆症(認知症)において, 子どもの発達と逆の方向に機能の解体が進むことを観察していることを取り上げ, また Ajuriaguerra の失行の3分類(①感覚-運動的失行, ②身体-空間性失行, ③象徴形成の失行)が自分の子どもの発達段階に対応していることを認めている。これら以外にも, 成人の神経心理学的症状と子どもの発達現象との間の類似性や相関性を指摘する議論は少なくない。

波多野(1991)は, 次のようなジャルゴン失語症例の報告をしている。この症例において発話は流暢で大量であり, 構音障害, プロソディ障害, 失文法はまったく認められなかったという。また, 話し方は濃厚な感情的色彩を帯びていた。言語理解は音韻面も意味面も重篤に障害されていて情報は希薄だが, 発話は成り立ち身振りや表情変化も豊富であった。

会話例<お名前をおっしゃってください>

「何か与えられて、何かこう、何かあったらあかんな・・・」

<お年はいくつ?>

「はい、ホーカイホカイ・・・こう、こうかけてね」, 「そして、あ・・・
ねえんやねえ・・・」

ここでは、言語の認知的意味構造が重篤に障害されているが、ことばの交話的機能や対話性は保たれているのがみとれる。

Y 児の事例では、語彙機能よりも統語機能（とりわけ終助詞「ね」）が早くに出現していることが示された。一方、上記の報告にあるように、成人の失語症において語彙機能は失われても統語機能（とりわけ終助詞「ね」）は残ることが報告されている。言語獲得後の脳器質性病変による後天的障害である失語と、脳の発達途上の子どもの認知、行動、あるいはことばとの比較や関連をみていくことは、双方にとって実り多い知見が得られるのではないかと考える。子どものジャルゴンの発達が成人のジャルゴン失語の回復における経過に類似しているという所見は、子どもの言語発達における言語中枢の発達に何らかの示唆を与えるのではないかとと思われる。すなわち、ジャルゴン失語発症における言語中枢の機能障害とその回復過程と、子どもの言語中枢の発達に何らかの意味での平行性が存在するのではないかという示唆である。

誰もが未熟さを抱えつつ発達していくのであり、子どもの初期発達において中枢の何らかのメカニズムが同調性の域をわずかに超えてズレを示しながら発達していくのではないかと考えられる。ジャルゴンタイプの言語発達を示す子どもは声でのやりとりが先行し、声に意味がのり記号的意味世界に入っていくのが遅れる晩成型ともいえる。そして、ほぼ2歳半には正常範囲内の言語発達を示していく。ジャルゴンタイプの子どもはジャルゴンでのやりとりで豊かな対人関係を築いている。成人のジャルゴン失語において、ジャルゴンは「言語の意味的価値の病態否認的解体」と定義される。しかし、初期言語発達におけるジャルゴンは、その声に豊かな意味を含んでいる。また、成人の失語症においても同様に、ジャルゴンによって対話し、感情表出

と共感的な交流がなされていることが改めて示された。ジャルゴンは言語の交差的機能を担い、その声に豊かな意味を含んでいるのである。

V. 初期言語発達の2つの系譜とジャルゴン

子どものジャルゴンは言語発達研究においてほとんど省みられてこなかった。ジャルゴンは初期言語発達における個人差を示唆する研究においてわずかに触れられているにすぎない。個人差についてのこれまでの研究は、2つの系譜に整理される。第1の系譜はことばの意味的理解が優先し一語発話が

表2 初期言語獲得過程にみられる個人差の研究

	<第1系譜>	<第2系譜>
村井 (1970)	「理解先行型」 (Preyer, 1882) (意味の理解が先に現れる)	「模倣先行型」 (Stern, 1907) (声の流れの模倣が先に現れる)
Nelson (1973)	「指示型」 (referential style) (最初の50語に事物の名前が多い) (語彙の急増の後に語結合)	「表現型」 (expressive style) (事物の名前が少なく、代名詞や機能語) (一語より長い定型句、社会個人的表現)
Dore (1974)	「記号志向」 (一語発話を命名、反復、練習に用いる) (環境内の事物に関心がある)	「メッセージ志向」 (語はほとんどなく、音声のイントネーションを変化させてコミュニケーションする) (社会的状況を操作するのに言語を用いる)
Bloom et al. (1975)	「名詞アプローチ」 (2つの内容語を結合させる)	「代名詞アプローチ」 (事物と事物の関係を代名詞と内容語を結合させる)
Bates (1988)	「分析的産出」を行う子ども 「理解主導型」 (人々が何を言おうとしているかに関心) * 左半球優位 (Broca失語に対応、 「失文症」: 流暢でない電文体の発話。機能語や文法上の屈折語尾を抜かす)	「非分析的な産出」を行う子ども 「生成主導型」 (他の人の発する声の流れをまねようとする) * 右半球優位 (Wernicke失語に対応、 流暢な発話、意味がない。 抑揚の早期使用、定形や固定形式への依存)
Shore (1995)	人より物への指向性	物より人への指向性

盛んで、そこから簡潔な発話そして文を整えていくタイプであり、第2の系譜は発話全体に焦点をおいて概略を描いた上で、そこから語や文の詳細を整えるタイプである。これまでの研究はいずれも有意味語を対象とするものであったが、Bates (1988) は第2の系譜においてジャルゴン (Bates のいう mushmouth) が出現することに言及している。またこの2つの系譜と成人失語における言語分類との類似性についても触れ、第1系譜は Broca 失語に類似し、第2系譜は Wernicke 失語に類似しているという。ジャルゴンタイプの子どもは、発話全体の模倣が先にあらわれ、声での対話的やりとりが優勢で長期にわたる言語発達を示した。Bates はジャルゴンが第1の系譜に属することを指摘はしたが、それについての十分なデータをもっていたわけではない。そのジャルゴンを矢野 (2006) は具体例でもって詳細に検討することが出来た。Y 児は長期にわたってジャルゴンでコミュニケーションをとり、記号的意味世界へ参入するのが遅れた。その言語発達は Wernicke 失語と類似している。Wernicke 失語は表面的には形式が整った流暢な発話であるが、記号的な意味がなく代名詞を多用して定型表現に頼るものである。Y 児のジャルゴンにおいては、語彙機能よりも統語機能 (とりわけ終助詞「ね」) が早くに出現した。さらに、Y 児ではジャルゴンそのものが発達し、その経緯と段階は成人のジャルゴン失語患者が改善するときの経緯を辿った。ジャルゴン失語は Wernicke 失語に属する。これらは、ジャルゴンタイプの言語発達と Wernicke 失語との類似を示している。

これらから、初期言語発達において、Broca の領域や Wernicke の領域によって補助されているメカニズムが同調性の枠をこえて、いずれかにぶれながら発達するのではないかという仮説が示される。ジャルゴンタイプの子どもは全体的な模倣に対するコミュニケーションへのかまえ、大規模なフレーズ単位の記憶、高い社交性を持ち、第1系譜の言語発達を示す子どもとは質的に異なる言語発達を示していると思われる。一語文から二、三語文による発話そして文法へといたるという「部分から全体への言語発達」の一般的な定式化は真実の半分しかとらえていなく、逆に「全体から部分への発達」を

たどる言語発達形式が存在することが本論から改めて示された。

VI. おわりに

ことばのはじめにおいては、声も意味も未分化で全体的なものであるが、その段階でもまわりの人々とかかわることにより、発話は分節化され意味化されていく。ジャルゴンタイプの言語発達を示す子どもは声でのやりとりが先行する。記号的意味の世界に入っていくのが一見遅れるようにみえるが、その生活世界において、有意味語を早く獲得する子どもの前の発達段階にいるわけではない。ジャルゴンでのやりとりで豊かな対人関係を築いている。対話的な場面においては、ジャルゴン発話という声そのものが意味を含みこんでいるといえる。ジャルゴンは、克服されるべき未熟さを示すものではなく、言語発達において重要な役割を担うものとして再認識しなければならぬことが明らかになったといえる。声も意味も共同的なものであり、だからこそ対話的な場における声は、ジャルゴンにおいてさえ交話的機能をはたし、やがてそれが意味につながるのである。

註

- (1) 「一般言語学講義」は、Saussureの死後、ジュネーブ大学での講義（1907から1911まで合計3学期にわたった）についての学生たちの講義ノートを資料・素材として、Saussureの教え子であった言語学者のBallyとSechehayeが編纂したものである。BallyとSechehayeは、Saussureの声を通して講義ノートをとったのである。ここには、発話における声と意味の問題が潜んでいるように思われる。
- (2) Jakobsonのいう言語の6機能は以下の通りである。①関接的 (referential) 一指示的 (denotative), 認知的 (cognitive) とも称される。②心情的 (emotive), または表現的 (expressive)。③動能的 (conative)。④交話的 (phatic)。⑤詩的 (poetic)。⑥メタ言語的 (meta-linguistic)。
- (3) 人間は生得的に発声装置をもち、出生と同時に泣き声を発する。出生後2週間ないし4週間たつと、機嫌のよいときに叫び声でない咽喉の奥から出る発声が発せられるようになる。「アクン」と聞こえるようなこの声をクーイングと称する。

文献

- Alajouanine, T. (1956) : Verbal relation in aphasia. *Brain*, 79, 1-28.
 Bakhtin, M. (1988) : ことば・対話・テキスト (新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛

- 訳 (1929) : ミハイル・バフチン著作集 8. 東京, 東京新時代社).
- Bates, E., Bretherton, I. & Snyder, L. (1988) : From first words to grammar : Individual differences and dissociable mechanisms. Cambridge University Press. New York.
- 陳常好 (1987) : 終助詞——話し手と聞き手のギャップをうめるための分節辞. 日本語学, 6-10.
- Goffman, E. (1963) : Behavior in public places : Notes on the social organization of Gathers. Macmillan, New York. (丸木恵佑・本名信行訳 (1980) : 集まりの構造. 東京, 誠信書房).
- Goldfield, B. A. & Snow, C. E. (1997) : Individual differences : Implication for the study of language acquisition. In J. G. Berko (ed.), *The development of language*. Allyn.
- 波多野和夫 (1991) : 重症失語の症状学—ジャルゴンとその周辺—. 京都, 金芳堂.
- 波多野和夫 (1995) : 発達心理学辞典「ジャルゴン」の項, (岡本夏木, 清水御代明, 村井潤一監修). 京都, ミネルヴァ書房.
- 岩原信九郎 (1964) : ノンパラメトリック法/新しい教育・心理統計. 東京, 日本文化科学社.
- 岩田誠 (1996) : 脳とことば——言語と神経機構. 東京, 共立出版.
- Jakobson, R. (1960) : Linguistics and poetics. in Roman Jakobson Selected Writings III, 18-51. Hague, Mouton. (川本茂雄監修 (1973) : 言語学と詩学. 田村マ子訳 : 一般言語学, 183-221. 東京, みすず書房).
- Jakobson, R. (1941/1963/1966) Les lois phoniques du langage enfantin et leur place la phonologie générale Kindersprache./ Aphasia und allgemeine Lautgesetze Toward A Linguistic Classification of Aphasic Impairments./ Linguistic Types of Aphasia. (服部四郎編・監訳 (1976) : 失語症と言語学, 東京, 岩波書店).
- 片桐恭弘 (1995) : 終助詞による対話調整. 月刊言語, 24 (11), 38-45.
- 小西輝夫 (1960) : 幼児の言語発達. 児童精神医学とその近接領域, 1, 62-74.
- Laver, J. (1975) : Communicative function of phatic communication, In A. Kendon et al. (ed.) Organization of behavior in face-to-face interaction. Mouton, The Hague, 215-238.
- Locke, J. (1993) : The child's path to spoken language. Cambridge, Harvard University Press.
- Masataka, N. (1992) : Pitch characteristics of Japanese maternal speech to infants. *Journal of Child Language*, 19, 213-223.
- Molfese, V. J. & Betz J. C. (1987) : Language and motor development in infancy : Three views with neuropsychological implication. *Developmental Neuropsychology*, 3, 255-274.
- 正高信男 (1993) : 0 歳児がことばを獲得するとき—行動学からのアプローチ. 中

- 公新書, 東京, 中央公論社.
- 村井潤一 (1995) : 発達心理学辞典「ジャルゴン (言語発達の)」の項, (岡本夏木, 清水御代明, 村井潤一監修). 京都, ミネルヴァ書房.
- Nelson, K. (1973) : Structure and strategy in learning to talk : Monographs of the society research. *Child Development*, 38.
- Ogden, C. K. & Richaeds, I. A. (1923) : The problem of meaning in primitive languages. In Ogden, C. K. & Richaeds, I. A. (ed.) : *Meaning of Meaning*. (石橋幸太郎訳 : 意味の意味. 東京, 刀江書院, 1951).
- 大橋博司 (1977) : 失語症 (改訂版). 東京, 中外医学社.
- 小津安二郎 : 東京物語. (井上和男編 (2003) : 小津安二郎全集下, 東京, 新書館).
- Piaget, J. (1960) : Problèmes de psychologie génétique : L'enfant et réalite. *Revue Neurologique*, 102, 551-565. (芳賀純訳 (1975) : 発生的心理学. 東京, 誠信書房).
- Saussure, F. (1949) : *Cours de linguistique generale*. Charles Bally et Albert Sechehaye. (小林英夫訳 (1972) : 一般言語学講義. 東京, 岩波書店).
- Siegel, S. (1956) : *Nonparametric statistics for behavioral sciences*. International Student Edition. McGraw-hill, Tokyo, Kogakusha.
- Sore, C. (1995) : *Individual difference in language development*. Sage.
- 佐野洋子, 加藤正弘 (1996) : 脳が言葉を取り戻すとき——失語症のカルテから. 東京, 日本放送出版協会.
- 矢野のり子 (2002) : 1歳6ヵ月児の発達の諸相と母親の主訴. 第43回日本児童青年精神医学会総会発表論文集.
- 矢野のり子 (2003) : jargon タイプの言語発達. 第14回日本発達心理学会大会発表論文集.
- 矢野のり子 (2003) : 1歳半健診における親と子への発達援助と支援. 第44回日本児童青年精神医学会総会発表論文集.
- 矢野のり子 (2004) : jargon タイプの言語発達——その2——. 第15回日本発達心理学会大会発表論文集.
- 矢野のり子 (2004) : 初期言語発達における終助詞「ね」の機能. 第14回社会言語科学学会大会論文集.
- 矢野のり子 (2005) : 発話をめぐる5章——音声・自我・ことば——. 哲學論集, 51, i-xvi.
- 矢野のり子 (2006) : ジャルゴンタイプの言語発達. 児童青年精神医学とその近接領域, 47 (5), 440-451.

(本学教授 発達臨床心理学)

〈キーワード〉 交話的機能, 失語症, 言語発達における個人差